「高瀬舟」の語り

松本　修

本稿の目的

「高瀬舟」の研究史は、森鷗外による「高瀬舟縁起」に間接・直接に示された「知足」と「ユウタナジイ」というモチーフを、テーマと取り違えることによって、その二つのことばをめぐる主題論として展開してきた。[1] その後、主題の分裂という評価を乗り越え、物語の一貫性をどのように読むかという方向で議論がすすみ、三好行雄[2]や小泉浩一郎[3]によって〈語り〉の重要性が指摘されたことを契機に、〈語り〉を一つのキーワードとしながら、多様な論が展開されてきている。「高瀬舟」における〈語り〉の重要性について、小泉は次のように述べている。[4]

> 庄兵衛の主観の展開すなわち作品の〈語り〉の構造それ自体の達成と限界とを、ともども明らかにせずして、作品「高瀬舟」の主題・モチーフの客観的な把握に至る途は、原理的に閉ざされている……

この小泉の指摘や三好の〈語り〉の構造分析をうけて、様々な論が提出されているが、ひとしく〈語り〉を重視しながら、その結論には相当の開きがある。小泉は、庄兵衛の認識の変革を次のように読みとっている。[5]

> 喜助の特殊性を、一般性もしくは合理性のレベルに引き下ろそうとする庄兵衛の「上辺」の観察をふまえての総ての試みは、当の庄兵衛本人によって、「嘘」として否定されるのであって、遂に「この根底はもっと深い処にあるようだ」という漠然たる、しかし、いっそう深い思念の世界に彼は、導かれてゆくのである。

小泉は、このような視点構造・〈語り〉の構造の限界をも指摘しているが、[6] これに対し、清水康次は同じく庄兵衛の立場を重視しつつ、次のようにより積極的な一貫性を読みとっている。[7]

> 喜助の行為の重さは庄兵衛によって発見されるものであり、喜助自身の独立した価値観や思想の問題ではない。独

特の語りの構造の中で、庄兵衛という人物を置いて、庄兵衛に喜助の固有の生を発見させるというのが『高瀬舟』の構想である。そして、ラストでの庄兵衛に残るわからなさこそ、この作品の到達地点を示すものである。

清水は喜助の生に対して、庄兵衛によって受け止められているものとしながらも固有性を認めている。それに対して、小泉はそのような固有性を認めず、もっぱら庄兵衛のドラマとしてとらえているという違いがある。また、角谷有一は、二論を批判的に受け継ぎつつ、次のように、権威に対する批判を読んでいる。[8]

喜助の「弟殺し」に関わる告白を聞く以前には庄兵衛に「足ることを知る」と見えたものは、むしろ、「生への執着」を捨てて弟によって願われた「生」を、自分が心の中で受け継いだ弟の遺志とともに生きようとする、「晴れやかで」「楽しそう」な喜助の姿だったのである。

〈語り手〉は、「自分より上のものの判断に任すほかない」ということを「オオトリテエに従うほかない」とフランス語で言い換えることによって、物語世界の時代（時間）を超えた外から「権威」というものを批判するような〈語り〉方をしているのである。

このように、ひとしく〈語り〉に着目しながら、解釈は分かれている。前半と後半とのどちらを重くみるか、あるいは、喜助をどのように評価するかという点において大きな違いがある。こうした違いが、〈語り〉の構造の把握の仕方や、一見客観的に見える〈語り〉の分析の実質と対応しているのではないかというのが当面の疑いである。ここでは、まず〈語り〉の把握がテクストにそってどのようになされているのかを比較検討し、それがそれぞれの解釈にどのように反映されているのかを明らかにしたい。

〈語り〉の分析

まず、「高瀬舟」の語りが問題にされる契機となった、三好行雄の〈語り〉の分析を見ておきたい。三好は、おおよそ次のように「高瀬舟」の〈語り〉を分析している。[9]

言述A
・作者の認識や、かれが設定した人物・時・場所・状況などを告げる、作者に属する言述
・作者（語り手）が語ろうとする物語世界の時空と登場人物を確定するための、いわば戯曲でいえばト書きにあたる言述

言述B
・視点人物としての庄兵衛に属する言述
・庄兵衛の心象を語り、喜助を外から描くための言述

言述C
・喜助がみずからの行動と心理を明かすための、直接話法

による語りという言述

三好は、この三つの関係について、「庄兵衛に属する言述Bには作者＝語り手の認識と見做される言述Aが時に混在している」「庄兵衛に属する言述Bと喜助に属する言述Cは作者＝語り手によって構築された小説世界の枠のなかで、庄兵衛と喜助の語りに偽装した作者＝語り手の言述であり、だから言述Aに入子型に包含されているとも見做される。」としている。

「高瀬舟」の語りのマクロ構造（ナラティヴ）は、作中人物をすべて三人称で呼ぶ、しかも物語内容の世界に直接に関与しない超越的な語り手が、庄兵衛という作中人物の心理を覗き込み、人物の思考・知覚・感覚としては庄兵衛にほぼ限定的に言及するという形になっている。庄兵衛が視点人物とされるのはそのためである。喜助のせりふは常に「　」にくくられた形で、しかも庄兵衛や語り手の口調とは異なる話体で提示されているから、いかに庄兵衛や語り手によって聞き取られ引用されたものだとはいえ、独立性が高い。三好が喜助に属する言述について「混用は見られない」とするゆえんであり、ときに喜助のことばが直接読み手に向かって語りかけられているなどとされるゆえんである。したがって、問題は、三好が「混在」というような、庄兵衛のことばと語り手のことばの関係というところにある。いわゆる描出表現をめぐる読者の読み方の違いがあらわれることになる。

角谷は、三好論について「「作者」と「語り手」を同じものとして言い換えている点には疑問を感じるし、氏が（B）「庄兵衛に属する言述」として括っている言説には二つの異なったレベルの言説が混在しているという点も気になる」[10]とした上で、おおむね次のように三つのレベルを修正している。

（1）〈語り手〉が小説の世界の外側からその世界のすべてを統括して語っている言説。時に〈語り手〉は事件や出来事を遠い過去に終わってしまったこととして語り、また時には庄兵衛その人のすぐ傍らから彼の思いや行為を今のこととして伝える。あるいはまた庄兵衛や喜助の直接語ったことを物語の展開に合わせてそのまま引用する。

（2）〈語り手〉が語っていながら、庄兵衛その人の思いがそのまま地の文の中に現れている言説。庄兵衛を内側から語る言説。

（3）庄兵衛と喜助の直接話法の言説[11]。

三好のあげていた言述Bへの言述Aの混在の例は、「庄兵衛の心の中には、いろいろに考えて見た末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云う念、オオトリテエに従う外ないと云う念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思ったのである。」という部分であり、「オオトリテエという観念が江戸の役人のものであるはずはない。〈のである〉という断定のしかたも言述Aにちかい。」としている[12]。この分析は穏当であろうが、「自分より上のものの判断に任す外ない」は、庄兵衛の思考をそのまま「と云う」という引用の形

で語り手が提示しているとも、「と云う」が語り手の要約を示すものとも読めるのに対し、「オオトリテエ」の方は、引用とはみなせないという違いがあるということも指摘しておきたい。いわば「オオトリテエに従う外ない」は、語り手による「つまり～と云う念」というような注釈的言い換えとみることが可能だということである。

角谷の指摘する疑問について言うと、第一の疑問は、三好の語り手概念が「作中で、作中人物と第三者の関係をとりむすぶ作者」として措定されている以上、それほど大きな問題ではない。問題はむしろ、「庄兵衛を介してのみ、ときに鷗外の認識が現れることを示している」と作家論の文脈につなげたところにある。この点については後述する。第二の疑問は、三好の言う「混在」が三好が庄兵衛に属すると判断している部分にもなお語り手に属すべきことばがあるという形で存在しているという指摘であり、角谷の分類はその部分を「語り手」側に移動したものとなっている。角谷は次のように述べている。[13]

三好氏が（B）に分類している「①庄兵衛は心の内に思った。②これまで、この高瀬舟の宰領をしたことは幾度だかしれない。……」という部分では、①の文は〈語り手〉が庄兵衛の行為や心情を外側から叙述している部分であり、②以下は〈語り手〉が庄兵衛の心の内側に入り込んでその思いをそのまま描き出している部分である。

三好は直接この部分について言及しているわけではないが、「庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってからも、単に役目の表で見張っているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。」というような部分を庄兵衛の言述に分類しているから、推測として、三好の言う「混在」にはこの部分は含まれていないという判断をしているのであろう。その上で角谷はこの①のような部分を〈語り手〉の言説としている。しかし、角谷の説明も十分とは言えない。庄兵衛と語り手のことばをめぐる「混在」の詳細を以下の部分テクストについて検討してみたい。[14]

①護送を命ぜられて、一しょに舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、只喜助が弟殺しの罪人だと云うことだけを聞いていた。②さて牢屋敷から桟橋まで連れて来る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆わぬようにしている。③しかもそれは、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚びる態度ではない。

④庄兵衛は不思議に思った。⑤そして舟に乗ってからも、単に役目の表で見張っているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

⑥その日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽った薄い雲が、月の輪郭をかすませ、ようよう近寄って来る夏の温さが、両岸の土からも、川床の土からも、靄になって立ち昇るかと思われる夜であった。⑦下京の町を離れて、加茂川

を横ぎった頃からは、あたりがひっそりとして、只舳(へさき)に割(さ)かれる水のささやきを聞くのみである。

⑧夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。⑨その額は晴やかで、目には微(かす)かなかがやきがある。

四つの部分に区切られている「高瀬舟」の第二の部分の冒頭近くである。①は羽田庄兵衛と名前で呼ばれる作中人物の庄兵衛の経験を語り手が外側から語っている部分であり、〈語り手〉の言説である。ただ「聞いていた」ということばを単なる経験とみなすか庄兵衛の内面の状態を示すとみなすかについては読み手によって違いがあろう。内面の状態とみなせば、三人称ながら語り手が作中人物の思考や感情に言及しているとみることができる。三人称でもそう考えれば描出表現に入り、いわば語り手の言説から作中人物の言説への中間的表現となる。この点では三好の分析は広く作中人物の思考・感情を読みとっているとも言える。②は、「さて」ということばを語り手による区切りとみるか、単に経過を示すかという読み方の違いはあろうが、いずれにせよ、「連れて来る」という方向の表現、「この」というダイクティックな指示表現、「見る」という視覚動詞、「自分」という一人称、「している」という継続相の表現という多くの標識から庄兵衛の思考が直接に提示されている表現とみることができる。ここは庄兵衛の心中思惟が直接提示されているか、語り手によってそれに近い形で提示されているか、読み手によって多少の違いがあろう。「この」も文脈指示ととれないことはない。③は「態度ではない」という現在形での否定判断が、語り手に属するか庄兵衛に属するか読みが分かれる。「しかもそれは」という接続と文脈指示による文脈の②との連続性を重視すれば庄兵衛の心中思惟とみることができる。また、「往々見受けるような」という総称的な判断を重視すれば、語り手による解説的言及とみることもできる。④⑤は①と同様の位相にある表現とみなせよう。⑥は、「その日」という非ダイクティックな時間表現、「であった」というタ系列の文末表現によって、語り手の言説としてみるか、視覚的描写と「思われる」という思考動詞・自発表現を重視して庄兵衛の言説としてみるか、やはり判断が分かれる。⑦は、「である」の判断を語り手による描写にかかるものとして語り手の言説とみるか、現在形であることと「聞く」という聴覚動詞を庄兵衛の感覚に属するものとして庄兵衛の感覚の提示とみるか、やはり分かれよう。⑧⑨は「黙っている」「かがやきがある」という継続相の表現、現在形の表現を重視して庄兵衛の心中思惟の提示とみるか、語り手による描写とみるか、判断が分かれる。

このように、「混在」の箇所は、語り手による語り手の思考・知覚・感覚の提示、語り手による庄兵衛の思考・知覚・感覚の提示、心中思惟などの庄兵衛の思考・知覚・判断の直接的な提示という三つの相を幅をもって揺れ動くような様相を呈している。描出表現としての性格が現れている表現である。こうした箇所は、特定の読み手の特定の解釈のもとでは、一貫性のある分析・分類ができるかもしれないが、テクストのどのセグメン

ト、どの標識を重視するかによって、位置づけが揺れる。そして実際には、そのような個別の読みによって作品の解釈が左右されているのである。以下、いくつかの論を語りの分析の観点から見直し、それぞれの解釈の根拠を再検討する。

解釈と〈語り〉

すでに言及したように、小泉と清水の読みの間には、庄兵衛と喜助との関係をどうとらえるかという違いがある。小泉と清水は次のように述べている。

喜助に対する「驚異の目」も、喜助の頭にさす「毫光」も、実はそのような庄兵衛の認識変革のドラマをふまえて生まれたもの、庄兵衛の主観を通じてのみ幻視されたものであることを無視することは許されない。（小泉）[15]

『高瀬舟』は、喜助の物語の後に、聞き手であった庄兵衛が考え込む場面がなければモチーフは完結しない。喜助の過去の物語は、語り手と聞き手のいる現在の語りの場に着陸する。語りの内の世界と、外の聞き手の世界は拮抗を保ち、語り手と聞き手の位置が正確に測定されている。そして、語られた物語を聞き手がどう捉えるかにおいて、作品の主題が提示される。（清水）[16]

小泉は、喜助の固有の生を庄兵衛のそれに拮抗するものとはとらえていない。それは、庄兵衛の内面のドラマとして、先にみてきた「混在」の言説を、より庄兵衛に寄り添うものとしてとらえていることを示唆する。そして、反対に清水は、より作中人物を離れた語り手の言説としてとらえていることを示唆する。なぜなら、「混在」の言説を語り手に寄って把握する場合、喜助の直接言説も、庄兵衛の心中思惟も語り手に対してほぼひとしい位置をとりうるのに対し、庄兵衛に寄って把握する場合、喜助と庄兵衛の位置づけはひとしいものとはならないからである。

小泉は「寒山拾得」を念頭におきつつ、「主人公の語り手（視点人物）に官僚―身分・役職の高下こそあれ―を設定し、それらの内在的もしくは外在的、あるいは意識的もしくは無意識的な自己否定へのプロセスが、これらの作品の主たるプロットを構成していることではなかろうか。」と述べ、[17]語り手＝視点人物とする見方を示しており、そもそも語り手の言説を庄兵衛の言説と一体のものととらえていることがわかる。それに対し、清水は、「『高瀬舟』の場合は、聞き手は鷗外ないし作者ではなく、庄兵衛という一登場人物である。語りの内の世界が描かれるだけでなく、それを受けとめる外の世界が庄兵衛という人物を介して描かれ、世間や社会と通じている。」として、[18]登場人物同士の話し手―聞き手関係を重視している。これはまた庄兵衛から離れたものとして語り手を把握することでもある。このような読み方の違いが「混在」の言説の細部において現れているというのが実態であり、そうした細部の解釈が主題解釈まで影響を与えているものと考えられる。

なお、毫光について三好は「毫光は庄兵衛によって相対化された喜助の頭に（そして庄兵衛の眼にだけ）見えるのであって、あえていえば、喜助のあずかり知らぬことなのである。」と述べ、[19] 小泉と同様の見方を示していた。しかし、三好は先行する論においては、「そらぞらしい嘘」としていた[20]のであり、語りの分析が庄兵衛の役割を顕在化させたということがわかる。

角谷は、小泉については、「〈語り手〉は、その〈語り〉の世界の内に視点人物としての庄兵衛を内包し、その庄兵衛の受け止めを通じて喜助の内面世界を描き、さらにそれを受け止め、変容していく庄兵衛を外側から距離をとって描いている」との語りの把握から、「実体概念の〈作家〉と関係概念の〈作者〉（機能としての〈作者〉概念）とを癒着させて、鷗外という生身の作家の主題意識やモチーフを盛るための器としてとらえている」と批判する。[21] また、清水については、「欠落しているのは、喜助の話を受け止める庄兵衛の変容を含んで『高瀬舟』という物語世界があるということであり、その世界全体を物語る〈語り手〉が存在するということである」「〈語り手〉の存在をそのまま生身の「作者」、実体概念の「鷗外」ととらえることで、物語世界を平板なものにしてしまっている」と批判する。[22] 角谷の語りの構造の把握は清水の把握に近いものと思われ、それは本稿におけるマクロ構造の把握とも共通している。清水が統括的な語り手の存在を無視しているというのは直接にはあたらない。しかし、〈作者〉概念の揺れはあるものの、小泉が語り手＝視点人物の同一視の上に、その語りを作家の主題を直接実現するものとみなしているという批判、清水が語り手に作家を重ね見ているという批判はそれなりにあたっていよう。というよりも主題を論ずる限り、入れ子構造をどんなに多極化させようが、どこかで作者ないし作家を持ち出さざるを得ず、そのときに語りの分析が先行する先験的な解釈に従属させられてしまうという構図は変わらないとも言える。すでに三好が、三種の言述を分類したあと、「庄兵衛を介してのみ、ときに鷗外の認識が現れることを示している」として「縁起」に結びつけていく行論をとっていた。[23] これは、「オオトリテエ」というフランス語を物語世界の時間を超えた外から権威を批判する語り方だとする角谷においても、実体的な作家に結びつけないまでも、権威批判という現代的テーマを導き出すという点においては、解釈の先行という事態を同じように招いているのかもしれないのである。

オオトリテエについては、小泉は、次のような見解をとっている。[24] 小泉は、「毫光によって喜助がオオトリテエそのものになったはずなのに鷗外はまた曖昧になった」というような唐木順三の指摘[25]を支持し、それは「庄兵衛と作者との離れにこそ起因した」とし、前半において喜助に仏を幻視したような庄兵衛がオオトリテエに従うという判断を下したとき、お奉行様を疑うという行為を捨てることによって、語り手＝庄兵衛の一体性が失われたというのである。角谷の指摘は、語り手ははなから庄兵衛と別にあるとして、前半と後半の乖離はないという議論となっていた。すでに三好の論を検討したように、語りの場における語り手の読み手への解説としてこの一文は機能している可能性があり、角谷の議論はその線に沿いつつ、可能な限り語

り手の独立性を認める読みを背景にしているものと思われる。清水は、「庄兵衛が感じ取るものは、外からの評価を受けつけずに完結している事態そのものの重さ」を読み取り、「評価の不可能を示すことで、喜助のものでしかない喜助の生が浮かび上がってくる。」と、語り手を埒外において喜助の生の固有性を読んでいる。[26] すでに見たように語り手を物語場面に臨在しないものとして把握していることが反映されている。

そもそも「語り手」は「語りの場」において、読み手に対して物語全体を統括するものとして語りかける一方で、物語内容の世界にも臨在し、その場で作中人物とは異なる立場から物語を語るという二重性を持っている。物語の場に臨在する語り手は、作中人物と遠近自在な距離を作りながら、空間的な知覚の基点としての視点を移動させることができる。この視点の移動と、語り手の「語りの場」における語りと「物語内容の世界」に臨在する語りとの自在な変化とを機械的・客観的には測定できないところに語りの読みとりの問題がある。物語世界に臨在する語り手は、作中人物との距離を一定に保っているわけでも、客観的に測定できるわけでもない。それは読み手の読み方の問題なのである。また、知覚の基点としての視点の置き方と語り手の物語内容への臨在の度合いは別のことであるのに、混同されやすい。次の表現を見てみたい。

①有り触れた例を挙げて見れば、当時相対死と云った情死を謀って、相手の女を殺して、自分だけ活き残った男と云うような類である。

②そう云う罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つつ、東へ走って、加茂川を横ぎって下るのであった。③この舟の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。④いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。⑤護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷属の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。

三好はこの部分を作者に属する言述としているが、読みの可能性としてはそう単純ではない。①は、「当時」という時間表現によって語り手が語りの場に位置していることを示し、物語世界とは離れた場から解説的に述べていることがわかる。しかし、改行をはさんで、②では「そう云う」というように文脈指示で前文を受けながらも、「見つつ」という視覚動詞や「走って」「横ぎって下る」というような動作をあらわす表現を含んでおり、「のであった」という解説的な文末表現にもかかわらず、物語世界への臨在性を若干強めている。この効果を見る場合、③④は語り手による解説という把握の他に、⑤にあらわれる「同心」の意識を語り手が提示したものという把握が可能になる。いわば庄兵衛の視点の先取りである。庄兵衛の登場する第二段を読んだあと、それが照応すれば、後者の把握が強化される場合もあろう。

第一段の部分でさえこのようなことが可能といえば可能であるから、次のような箇所は読み手によっていかようにも読むことができる。

喜助の話は好く条理が立っている。殆ど条理が立ち過ぎていると云っても好い位である。これは半年程の間、当時の事を幾度も思い浮かべて見たのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるその度毎に、注意に注意を加えて浚って見させられたのとのためである。

庄兵衛の心中思惟の直接的な提示、語り手の解説、後半は喜助の思考内容の語り手による提示など、多様な把握が可能である。すでに見た次のような情景描写は、語り手の言説とみるか、現在形であることと「聞く」という聴覚動詞を庄兵衛の感覚に属するものとして庄兵衛の感覚の提示とみるか、としたが、極端な場合喜助の感覚の提示とみることも可能である。

下京の町を離れて、加茂川を横ぎった頃からは、あたりがひっそりとして、只舳に割かれる水のささやきを聞くのみである。

このような部分テクストの把握が、解釈の形成に与っているはずである。検討してきた主題解釈の対立はこうした部分の読みの相違と対応している。逆に言えば、主題解釈の相違を部分テクストにおける語りの分析の相違から説明することが可能なのである。また、解釈に現れる矛盾のようなものは、部分テクストにおける語りの分析と別の部分テクストにおける語りの分析ととの背反によるものである可能性がある。主題論などの結果だけを比べても意味はないのであり、解釈を導く〈語り〉の分析の過程をも含めて考えなくては、それぞれの読みをどう評価するかということにはつながらないのである。

教室での読み

「高瀬舟」は中学校および高等学校における国語科の教材として親しまれてきた。教室における「高瀬舟」の読みに以上のような検討がどのような示唆を与えるであろうか。語りの分析は互いの読みを交流するという教室において典型的な読みの活動の基盤となるという観点から、最後にこの点について触れておきたい。

角谷は、「作品の文脈を切断」し、「テクストの中のノイズに耳を傾ける」ことによって安楽死を偽りだと論じる出原隆俊[27]を批判して、「文学作品の文脈をことさらズラせたり、場合によっては否定したりする読み方は、教室の生徒達のさまざまな読みを無批判に肯定して、それを「読みの交流」だとしたり、場合によっては解釈を放棄した、作品を使った言葉遊びを文学作品の授業だとするような実践をどこかで支えるものとして機能するのではないかという懸念を抱いてしまう」と述べている。[28]

この批判は、テクストの一部分だけに反応して何ら一貫性を持たない読みを、すべて自立した読みと認めてしまうという過ちを犯してきた「読者論を僭称する授業」の問題点を衝いている。そのようなばらばらな読みを言い合うことは、いわば衝突のない多様性に読みの行為や学習活動を開いてしまうことであ

り、それは到底交流とは言えない。また同時に、この批判は、テクストの一貫性に配慮しない読みの理論そのものに対する批判でもある。読みの学習は読みの理論に支えられるものであり、アナーキーな読みを容認する理論もまたそれ自体アナーキーなものと考えるべきだという主張であろう。

しかし、かつての解釈的・注釈的授業のようにテクストの文脈をただ単純に追っていけば読みが成立するというわけでもないし、解釈の多様性が封じ込められるわけでもない。すでに見てきたように、テクストの文脈においてあるテクストのセグメントをどのように受けとめ、他のセグメントとどう結びつけるか、語りをどのように把握しているかによって、解釈は分かれている。交流を可能にするのは、そのような背景にあるテクスト細部の読みのプロセスを明らかにし、互いに理解可能な解釈過程として説明し合うことである。

たとえば、本稿で語りの分析を行ったような一部分について徹底的に「誰の立場から誰の知覚や思考を述べているか」を学習者自身に分析させ、その一文ごとの分析を互いに提示し合いながら、グループによる話し合い活動を行って、それぞれのテクストへのアプローチが異なるということを確認していくような学習過程を構想することができる。その場合、部分テクストへの個々のアプローチが、文学というものへのそれぞれの読みのストラテジーを背景として現れているということが徐々に明らかになっていく。それは互いの解釈結果ではなく解釈にいたるプロセスを問題にすることで読むという行為そのものを学習の対象としていくことでもある。

またたとえば、やはり本稿でとりあげたような「下京（しもきょう）の町を離れて、加茂川を横ぎった頃からは、あたりがひっそりとして、只舳（へさき）に割（さ）かれる水のささやきを聞くのみである」というような情景描写において、個々の読み手に対して「誰の声が聞こえるか」というような発問について考えさせ、なぜその声が聞こえるのかということを、テクストへのアプローチの仕方も含めて説明させるような学習過程を構想することができる。これを「語り手の声だ」とする学習者と「喜助の声だ」とする学習者とでは、かなりテクストへの参入のあり方が違うということが想像できる。互いの違いに気づいた学習者は、その根拠をめぐって、他の部分テクストの読みや、マクロ構造の考え方や、場合によっては作品の内容や作品の成立にかかわる社会文化的なコンテクストをも問題にして検討を進めるであろう。ここでもまた、個々の学習者は話し合いを通じてそれぞれの読みのストラテジーをも対象として考察し、他の学習者との比較を行っていくことになる。それは読みの学習であると同時に自らの読み方を明らかにし、反省していく学習である。

読みの学習はこのように、読みそのものを対象化して自己を見つめる学習になるのが必然である。そうでなければ集団で読みを学習することの意味はない。読みの学習は読み方の学習である。その重要な契機の一つになるのが〈語り〉への着目である。

その意味で、文学研究を語りの側面から再検討していくことが、教材研究としても教室での読みの形成においても意義ある

ことと考える。とりわけ主題にかかわる解釈は、解釈を導くテクストの細部への接近のあり方によって左右されており、「高瀬舟」の主題を考えることは、それぞれの読みに潜在している〈語り〉への接近の仕方を自ら明らかにしていくことにつながる。それは、互いの読みを比べる限り、教室の外においても同じことであろう。竹内常一は高瀬舟という装置は再審の場であるという読み[29]を提出しているが、「高瀬舟」というテクストは、いわば〈読みの再審の場〉として読者の参入をうながしているとも言えよう。

注

(1) 「高瀬舟縁起」には「知足」という語は見られない。「高瀬舟」本文に「足るることを知っていることである」という形で現れるに過ぎない。菅（二〇〇一）は、テクスト内部に存在しない「知足者富」（老子）や「安養知足」（仏教語）に通じる「知足」に置き換えることの問題を指摘している。「知足」はテクストにも縁起にも登場しない語である。なお、石田（一九九九）は、「目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だ」という本文に基づいて、「知足不辱。知止不殆。」（老子）を指摘し、竹内（一九九九）は「知足安分（心）」を指摘している。

菅聡子　二〇〇一「森鷗外『高瀬舟』を〈読むこと〉」田中実・須貝千里編

千里編『文学の力×教材の力　中学校編3年』教育出版

石田忠彦　一九九九「『高瀬舟』論」田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ1』右文書院

竹内常一　一九九九「〈再審の場〉としての『高瀬舟』」田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ1』右文書院

(2) 三好行雄　一九九三「『高瀬舟』論――知足の構造」竹盛天雄編『別冊國文學　森鷗外必携』№37　學燈社　一九八九・一〇（三好行雄『三好行雄著作集第二巻　森鷗外・夏目漱石』筑摩書房

(3) 小泉浩一郎　一九九〇「『高瀬舟』論――〈語り〉の構造をめぐって」『近代日本文学の諸相』（安川定男先生古稀記念論集）明治書院

(4) 小泉浩一郎　前掲　p.23

(5) 小泉浩一郎　前掲　p.26

(6) 「〈語り〉の構造」「視点構造」などの用語の混在が角谷（二〇〇一）によって指摘されたりしているが、ここでは他の論における用語も含め、とりあえずいちいち吟味せずに検討することとする。

角谷有一　二〇〇一「プロットの読みを深める」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力　中学校編3年』教育出版

(7) 清水康次　一九九五「『高瀬舟』の視界」森鷗外研究会編『森鷗外研究』6　和泉書院　pp.190-191

(8) 角谷有一　前掲（注6）p.160

(9) 三好行雄　前掲　pp.78-82

(10) 角谷有一　前掲　pp.149-150

(11) 角谷も言及しているように、三好の「言述」は角谷の「言説」に対応している。いずれも discourse にあたる用語であろう。

(12) 三好行雄　前掲　p.79

(13) 角谷有一　前掲　p.149

(14) 語りの分析の方法的枠組みについては、松本修（2002a）（2002b）にほぼ沿っている。

松本修　2002a「「走れメロス」の語り」『宇大国語論究』13　宇都宮大学国語教育学会

松本修　2002b「文学教材における語りの分析の方法――「にじの見える橋」（杉みき子）を例に――」『Groupe Bricolage 紀要』20　Groupe Bricolage

(15) 小泉浩一郎　前掲　pp.27-28

(16) 清水康次　前掲　p.193

(17) 小泉浩一郎　前掲　p.22

(18) 清水康次　前掲　pp.191-192

(19) 三好行雄　前掲　p.81

(20) 三好行雄　一九六六「解説」『森鷗外』有精堂
(21) 角谷有一　前掲　p.156
(22) 角谷有一　前掲　pp.156-157
(23) 三好行雄　一九九三「『高瀬舟』論――知足の構造」竹盛天雄編『別冊國文學　森鷗外必携』No.37　學燈社　一九八九・一〇（三好行雄『三好行雄著作集第二巻　森鷗外・夏目漱石』筑摩書房　p.79
(24) 小泉浩一郎　前掲　pp.31-32
(25) 唐木順三　一九四三『鷗外の精神』筑摩書房
(26) 清水康次　前掲　p.189
(27) 出原隆俊　一九九九「『高瀬舟』異説」『森鷗外研究』8　和泉書院
(28) 角谷有一　前掲　p.157
(29) 竹内常一　一九九九「〈再審の場〉としての「高瀬舟」」田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ1』右文書院

（本稿においては、「高瀬舟」の本文は森鷗外　一九七三『鷗外全集』第16巻　岩波書店を参照用として用いるものの、引用は森鷗外　一九八五『山椒大夫・高瀬舟』新潮文庫によっている。）

（まつもと　おさむ　上越教育大学学習臨床講座　助教授）